# 2022年5月29日　説教『キリストを認識する光』本所緑星教会　岡田恵美子牧師
## 聖書　コリントの信徒への手紙二　４章7～18節

皆さま、はじめまして。本所緑星教会で牧師をしております、岡田恵美子と申します。高橋克樹先生は、日本聖書神学校時代の恩師であり、神学校卒業時に在籍していた教会の牧師でもありました。本日は青戸教会で皆さまと共に礼拝をし、礼拝でのメッセージをできますことを神にあって感謝いたします。

本日は、コリントの信徒への手紙二のパウロの言葉から、メッセージをしたいと思います。

コリント教会は、使徒言行録１８章１～８節によると、第二回目の伝道旅行の際に、パウロが設立し、一年半留まった教会と言われています。しかし、このコリントの信徒への手紙二を見ると、パウロとコリント教会との関係は、あまりよくない状況と考えられています。コリント教会は、パウロへの反対者が侵入したことで、コリントの人々の心がパウロから離れ、パウロの使徒職を疑問視するという事態があったようです。岩波書店から出ている新約聖書に書いてある解説によると、そのパウロの反対者たちは、ある種の力強さ、優秀さを誇っていたというのです。ある種の力強さ、とか優秀さとは何か、はっきりしたことはわからない部分もあります。しかしパウロが１０～１１章あたりで、自分の反対者や、パウロの悪口について反論しているところからすると、パウロの反対者たちや一部の信徒たちが、コリントでパウロをけなしており、その人々は、「面と向かうと弱腰だが、離れていると強硬な態度だ」とか「話もつまらない」と言い、パウロがコリントの教会の人々に対して「あなたがたはうわべのことだけを見ています」とか、コリント教会の「自己推薦する者たち」について批判している様子、パウロはこの手紙の中で「弱さ」について誇っていることから推測するに、人間が誇る「強さ」に対して、神にある「誇り」とは何かということについて考えさせられるものです。そしてまた、パウロは、この手紙の中で、キリストの命は、苦難の只中でこそ現実となる、ということを語っています。

パウロやコリントの信徒たちが直面した問題は、すなわち「何を誇るのか」ということなのかも知れません。そしてこれは、現代のキリスト者たちにとっても、問われていることだと思います。復活したキリストを勝利者として見、キリストの神としての姿を強調し、人間であるキリストの苦難を切り離してしまうことの危険性をこのようなところから感じるものです。キリストはスーパーヒーローである、「強く」「オールマイティ」「完全」ということを見て、強調していくとき、知らない間に十字架の道を歩んだキリストを切り離し、苦難の内にあるキリストの「痛み」をなかったことにしてしまう危険性を感じます。

キリストの「痛み」は、世にある悩み苦しむ者の「痛み」でもあります。十字架の苦難を切り離し、復活の勝利だけを見るのは、「結果」だけ、「うわべ」だけを見ている状態ともいえます。

「結果」「うわべ」にばかりとらわれている状態を、見えるものに気をとられている状態とすることができるのではないかと思います。しかし、キリストにある私たちは、見えないものに目を注ぐと、パウロは言っています。世の中に「無駄な努力」という考えがあるとしたら、これは「結果」に囚われている中で出てくる表現かもしれません。

1　しかし、視点を変えたとき、努力、苦労の中にこそ、尊いものがある、物事は無駄

に見えるようなことの連続でもある、という考え方もあるかと思います。実は、大切なことは、私たちの見えていない部分、無駄だと思っているようなことの中に隠れているのかもしれないのです。パウロは、今日の個所では、徹底的に逆説的な言葉を記し、「苦難」「艱難」の中に働く復活の命について語っています。ここでは、苦難、艱難は、成功のための道具ではないのです。目からウロコの、発想の転換なのです。

パウロは7節で「わたしたちはこのような宝を土の器の中に納めている」と語っていますが、「このような宝」とは一体何を指しているのでしょうか。それは4章6節にある言葉ではないかと思います。短く言えば、直前の「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光」ということではないかと思います。もっと短く言えば、イエス・キリストの放つ「栄光」を悟る光を与えられたということでしょう。その光というのは6節にあるように「闇から光が輝き出よ」と命じられた神が与えられた「光」であるということです。

パウロに言わせると、キリストの放つ栄光、それは、神の栄光の光でもあり、福音の光でもあるということなのだと思います。私たち信じた者は、この栄光を悟る光を与えられたということです。

「光」は、パウロにとって大切なものであるということを、ここで考えさせられるのです。というのは、使徒言行録9章にありますが、パウロがキリストに初めて出会った経験について、次のように書いてあります。「突然、天からの光がパウロの周りを照らし、彼は地に倒れ、キリストから直接名前を呼ばれる経験をし、その後、目が見えなくなり、キリストの弟子たちに助けられ、アナニアの按手の後、目からうろこのようなものが落ち、また元通り目が見えるようになった」というものです。

パウロは、それまで、キリストの放つ光が見えてなかったけれども、このような経験によって、キリストにある神の栄光を認識するようになったという理解なのではないかと思うのです。そして、それは、パウロ自身が「光に照らされる、包まれる」という不思議な体験を通してだったために、パウロの神理解は、「光」の認識を強調するものではないかと思います。また、今日の聖書個所は、パウロの「イエスの復活」理解に関することが語られていると思う時に、パウロのキリストとの出会いこそが、パウロにとっての「復活」を身にまとう経験であったと思わされます。今まで見えなかったことが見えた出来事であり、パウロが徹底的に排除しようとしていたものの中に神がいたことを知る出来事だったのです。

神によって与えられたキリストを悟る光をパウロは「宝」と呼ぶのですが、どうして「宝」なのかと言えば、これによって、私たちは、今までとは違った生き方を知るようになるということではないでしょうか。もう少し言えば、この世のシステムや、人間の限界ある生き方を超越した、神の力に頼って生きることができるようになるということです。

8～15節にある「逆説的な言葉」の数々は、私たちの視点に変化をもたらします。苦しめられても、窮地に追い込まれず、途方にくれても絶望しない。虐げられても見捨てられず、投げ倒されても滅ぼされない、と。苦しみの極みで、八方ふさがりの中で、虐げられている（迫害されても）中で、倒されている時、孤独で、希望を失い、途方に暮れ、生きる意味を見失いそうになるのではないかと思うのですが、キリストにある光を認識するならば、そのようなことはないとパウロは語るわけです。

キリスト者は、イエスの「死」を身にまとっていると言います。この10節の「死」という言葉は、実に「死」ではなく、「殺されたこと」「殺害」という意味が本当の訳なのです。

１０節、１１節を読むとき、イエスの十字架を、単なる「死」として見るのではなく、「イエスが殺された」と読み込むことには意味があります。それは、どのような人々に殺されたのか、ということを含む表現であると思うのです。そしてそれは、イエスが、どのような人々のことを思って、愛して、殺されたかということでもあると思わされるのです。イエスは、世の中で、苦しめられ、窮地に立たされる、途方に暮れさせられる、虐げられる側に、共に立っておられるのではないでしょうか。これもまた、キリスト者がまとう「死」が単なる「死」ではないことを、絶望を意味するのではないことを思わされます。

人の世において、「栄光」「称賛」される事柄は、キリストにおいては、必ずしも「栄光」というわけではないということを、パウロは語りたいのだろうと思います。人の世での栄光というのは、しばしば、自分のためだけのものになりがちであると思います。誰かにひけらかすための、自分が他者よりも優れているということや、多く持っているということを示すためのものは、神の前には、あまり意味がないということなのかもしれません。神の前にある「栄光」は、15節にあるように、「あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるための」ものであるということなのです。いうなれば、社会に還元されていく「恵み」を求めることを、キリストにある光によって悟ることのできるようになったと思うのです。

実は、今日の聖書の中でとても大切だと思う言葉が、7節、１７節にあります。しかし、新共同訳では、日本語に訳されている中で、この言葉がわかりにくくなっています。それは、7節の「並み外れて偉大な」と訳されている言葉です。それは「卓越した」という意味の言葉です。そして、１７節では、日本語では「比べ物にならない」という言葉になっていますが、実際のギリシア語に忠実に訳すなら、「なぜなら、私たちの一時的な艱難の軽さは、卓越したやり方で、私たちに永遠の栄光の重さをもたらすのです」と訳されるのです。つまり、7節で言っているところの、土の器に納められた宝は、神のものであり、これは人間からは決して発することができないもの、「卓越した」ものであることを語り、１７節で、もう一度、この「卓越したやり方」で、という言葉を用い、神によって、私たちの艱難が、永遠の重みに満ちた栄光につくり変えられると言っています。神の偉大な、卓越したやり方で、人にとっては艱難と思えるようなものが、苦難が、永遠の栄光に変えられるというのです。それは目に見えないものであるけれども、神の宝である、キリストの栄光を悟る光を与えられたことによって、目には見えていなくても、うわべにはそのことは分からなくても、私たちは、神にあって大切なことを見い出し、生きるために本当に大切なものを手に入れるということではないでしょうか。

目に見えるものの方に価値があるように思われがちであり、成功や勝利を収めることにどうしても心を奪われがちな世にあって、キリストの福音は、私たちに他の価値観を見い出させます。

イエスを信じることは、私たちが世にある価値観とは、違う価値観をもって歩むということです。生きるために本当に必要なこと、それは人がどん底においても生きるための力ではないだろうかと思います。私たちは、生きていれば、さまざまな出来事に遭遇します。いいこともあれば悪いこともあります。嬉しいこともあれば悲しいことも、落ち込むこともあります。世の中では、あまりにも「ネガティブだ」「マイナスだ」と思われることについては、なかったことのようにしたがり、楽しいこと、嬉しいこと、よかったこと、うまくいったことばかりに着目しがちです。苦しいこと、悲しいこと、悪かったこと、失敗したことについては、なかったことにしてしまいがちだという

ことです。
　パウロが語るような、「苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」。そのようなことは、一体どうして実現できるのでしょうか。これは、自分一人の力ではなしえないことだと思われます。そして、私と神という、関係性の中だけでそれもまた為し得ないことだと思われます。信仰を共にする仲間がいる、助けてくれる仲間がいることで、為し得ることではないだろうかと思います。それがなければ、「苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず……」ということは起こりえない。
　反対に、私たちが弱くなっているときに、その弱さを安心して出せる場があれば、自らの愚かさを安心して語る場があればと思うのです。また、私たちも、自分自身の弱さを価値のないものとするのではなく、弱さを大切にすることができればと思うのです。弱さというのは、「強さ」を頼みとし、強さを栄光だと思うならば、価値のないものと考えられてしまうかもしれませんが、べてるの家の「当事者研究」を読んだりしますと、「弱さの情報公開」という言葉や、「苦労を自分のものにする」「いい苦労をする」「仲間とつながる」という宝石のような言葉が目に留まります。「強く」あろうとし、独りで必死に頑張ろうとしたとしても、人は、自分一人の力に頼って生きていくことはできないのです。そして、一人よりも二人、二人よりも三人、三人よりももっと多くの人が互いに支え合う中で、より安心して助け合うことができるようになるのです。多くの人が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて、神に栄光を帰す。そのようなことが、教会において、なされることを祈りたいと思います。
　神によって与えられたキリストを悟る光とは、愛の力であり、より多くの人が孤独から抜け出し、自らの弱さを捨てることなく、大切にし、その弱さを軸にして繋がることができることを知ることではないだろうかと思います。
　パウロは、「力は弱さの中でこそ発揮される」とこの書簡の１１章９節でも語っています。それこそが、キリストの十字架の逆説の神秘ではないでしょうか。
　私たちは、十字架の死を身にまといながらも、復活の命にあずかる者として、この世において、逆説的な恵みを実践する歩みに生かされているのです。

【祈り】
　復活の主。その神秘にあずからせてくださる神に感謝します。私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされていることを感謝します。神により深く信頼し、神を愛し、自分を愛し、人を愛することができるように導いてください。この一週間、守り導いて下さい。すべてをゆだね、感謝し、イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。


4